

発見!

おごり 遺産

No. 030

茅の輪くぐり

初夏の神社の風物詩とも言える茅の輪くぐり。植物で作られたあの大きな輪には、どのような目的や意味があるのでしょうか。



▲御勢大霊石神社(大保)の茅の輪くぐり



▼▲八龍神社(津古)の茅の輪くぐり



田植えが終わりサナボリ(田植え後の疲れを癒やす期間)の時期になると、茅という草で編んだ直径1.5〜2メートルの「茅の輪」を作り、神社境内に設置します。そして、多くの参拝者が無病息災や厄除け、家内安全を願ってこの輪をくぐります。この茅の輪くぐりは、日本全国の多くの神社で、主に6月30日ごろに行われる「大祓」「夏越の祓」という神事の中で行われます。

この風習は、「備後国風土記」に由来すると言われています。それは、備後国で暮らしていた蘇民将来が、旅の途中に宿を求めて訪れたスサノオノミコトを、貧しいながらも精一杯もてなし、その恩返しとして「腰に茅の輪をつけていたら、疫病を逃れることができる」との教えを授かり、難を逃れたという説話です。市内でも多くの神社で茅の輪くぐりが行われています。

八龍神社(津古)では、参道の中ほどに茅の輪が据えられます。参拝者は茅の輪の前で浄めの水をかけてもらい、一礼して茅の輪をくぐります。そこから神殿まで進み、正面で二礼二拍手一礼。その後、神殿に向かって左手に回り、本殿の後ろでも二礼二拍手一礼して、神殿の周りを合計3周します。参拝者は裸足で、当日参拝できない家族の着物を風呂敷に包んで参拝するのが特徴的です。

玉垂御子神社(大板井)の茅の輪くぐりは、平成12年(2000)に始められました。茅の輪は楼門と神殿の間に据えられ、参拝者は茅の輪を左回り1回、右回り1回、左回り1回して神殿に進みます。神事が終われば茅の輪は解体しますが、その時に残った茅で小さな茅の輪を作り、家で厄除けにすることもありますが、ありません。

御勢大霊石神社(大保)では、7月末から8月初めの夏祭りの際に、茅の輪くぐりが行われます。神殿の柱に茅の輪を据え、多くの人が参拝します。

他にも、祇園神社(小郡)、福童神社(福童)、隼鷹神社(横隈)など、多くの神社で茅の輪くぐりが行われています。皆さんも神事や夏祭りに合わせて、地域の神社を訪れてみてはいかがでしょうか。

問 文化財課文化財係 ☎75・7555